

リアクションペーパーの記述理由に基づく大学生の特徴

○野中陽一朗¹・井秋山 涼¹・井河端 涼¹・井喜多真明²(¹高知大学教育学部・²中村南小学校)

問題と目的

大学教育の質を向上させる取り組みが推進されて久しい。こうした中、リアクションペーパー(以下、RP)等の紙媒体は、講義型授業において授業担当者と大学生間の相互作用を支援するツールとして活用されている。小野田・利根川・上淵(2011)は、RPに「分かったこと」と「分からなかったこと」の記述を求め、理解、疑問、感想の3項目から記述文章を整理し、理解の割合が最も高いこと、記述内容分類において単純報告が多いものの自分なりに授業内容を解釈するといった拡張的な記述もあることを見出している。また、小野田・篠ヶ谷(2011)はRP記述を半期の講義で実施した大学生を対象に調査を実施し、RP記述の捉え方が4因子から構成されることを示している。すなわち、RPは講義型授業の質を向上させる1つと考えられ、RPの記述を反映した授業設計も求められる。しかし、RP記述の捉え方に対する大学生の実態把握や授業での学習内容へのアプローチに及ぼす影響も検討する必要があるだろう。

そこで、本研究では、大学の講義型授業で使用されるRPの記述理由から大学生のタイプの類型化を行うとともに、補足的にRPの記述理由に基づくタイプごとに深い学習アプローチと浅い学習アプローチの評定得点に差異が生じるかを検討することを目的とする。

方法

実施手続きと調査協力者 調査の実施は、半期にわたりRPの記述を講義中に課してきた受講生を対象に実施した。具体的には、個人記入形式の質問紙を配付し、趣旨等を説明後、協力を承諾した者のみに記入するよう依頼を行った。その結果、146名中129名が調査協力者となった。

質問紙 (1)RPの記述理由：小野田・篠ヶ谷(2011)の「RPに対する学生の認識」を構成する4因子13項目(5件法)。(2)学習アプローチ：河井・溝上(2012)の「学習アプローチ」を構成する2因子15項目(5件法)。なお、本調査で実施した質問紙は、その他の尺度も含めて構成されていた。本稿では、研究目的に合致する内容のみ記載した。

結果と考察

RPの記述理由を構成する「内容記憶志向」、「記述訓練志向」、「理解度伝達志向」、「私的交流志向」といった各因子からRPの記述理由に基づくタイプを類型化するため、各因子の評定得点に基づきクラスター分析(Ward法)を行った。その結果、解釈可能性から4クラスター解を採用した(Table 1)。

各クラスターの特徴として、人数比が最も高く3因子で最も得点が高いタイプ1は、RP有効活用型と考えられる。人数比が最も低く3因子で最も得点が低いだけでなく4因子とも理論的中間値より低いタイプ2は、RP未活用型と考えられる。タイプ3は、内容記憶志向得点が最も高く他の3因子とも理論的中間値より低いことから内容記憶重視RP活用型と考えられる。タイプ4は、内容記憶志向得点が最も低く他の3因子とも理論的中間値より高いことから内容深化及び交流重視RP活用型と考えられる。タイプ2の受講生に対しては、RPのツールとしての有効性を認識できる介入や事前の教示が必要となるだろう。

一方、各学習アプローチに対して、クラスターを被験者間要因とする分散分析を行った結果、深い学習アプローチに効果がみられ($F(3,125)=4.57, p=.004 (\eta^2=.099)$)、多重比較(Ryan法)の結果、タイプ1はタイプ3よりも評定得点が高いものだった。このことは、講義の主目的をどう設定するかによるが、RPの記述理由に関する認識が学びを深める一翼を担う可能性を示唆している。今後は、タイプごとにRPの記述内容自体にどのような特徴があるかを踏まえた検討も必要となるだろう。

Table 1 RPの記述理由に基づくタイプ

	内容記憶志向	記述訓練志向	理解度伝達志向	私的交流志向
タイプ1(64)	3.39	3.91	3.73	3.56
タイプ2(10)	2.50	2.37	1.93	1.47
タイプ3(37)	3.52	2.83	2.87	2.76
タイプ4(18)	1.89	3.07	3.20	3.18

()内は人数を示している。

付記

本研究は、JSPS 科研費(課題番号: 19K14318)の助成を受けた。